



テオフィル・ゴーチエと舞台芸術：
ジゼルはどこに？

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2015-06-15 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 澤田, 肇 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10466/14529

第3回講演（2）
芸術、文学とジェンダー

テオフィル・ゴーチエと舞台芸術

——ジゼルはどこに？——

澤田 肇

ゴーチエ（1811-72）は、多芸多才の人であり、恋多き男だった。少年の頃から将来画家として成功するだろうと周囲の誰もが思うほど絵筆が達者で、詩人として『七宝とカメオ』（1852）でフランス語の美の極致を表し、小説『モーパン嬢』（1835）の序文で「芸術のための芸術」の宣言により芸術家の指針を示し、『アヴァタール（化身）』（1856）など多くの怪奇な物語によってフランスで幻想小説が定着することに貢献し、ロマンティック・バレエの代表作の一つとなる《ジゼル》（1841）の台本を書き、騎士小説『キャピテヌ・フラカス』（1863）では冒険活劇で国民の人気を集め、スペインやアルジェリア、トルコなど数多くの旅行記で異国趣味を広める。7月王政下での『ラ・プレス』紙と第2帝政下での『ル・モニトゥール・ユニヴェルセル』紙という主要な日刊紙の文芸評論欄で、演劇や美術評論を長く務めることで制作側にも読者側にも多大な影響を及ぼした。つま



図1 オギュスト・ド・シャティヨンによるゴーチエの肖像画（1839）

りは同時代のさまざまな芸術の交錯する地点に、多くの作家や文化人の間の接点に居続けて活動したのである。

このようにゴーチエは、創作によっても批評によっても、19世紀の芸術と文学を理解するための要となる人物である¹⁾。この作家はまた戦争や革命のために何度も政治体制が変わる激動の時代を歩んだ人間であり、時代の思潮に揺り動かされる中で人生と愛のあり方を選び取りながら生き抜いた。数多くの女性との幸せな恋愛を体験しながら、不可解な行動を人生の門出と幕引きの際にとる。19世紀に女性がどのように扱われ、どのような意味をもたされていたのかを探るには、ゴーチエという作家が非常に興味深い一例を提供してくれるであろう。この美の信奉者の魂に救いをもたらしたのが、カルロッタ・グリジ（1819-1899）というエトワールであり、彼女のために制作したロマンティック・バレエ《ジゼル》と幻想小説『スピリット』（1865）であると考えられる。その二作品を軸にして、人生と創造の軌跡を追うことによりゴーチエにとっての女性とともにある理想の生き方というものを探ることは、女性学の問題としても意義あるものではないだろうか。

1 《薔薇の精》から《ジゼル》まで舞台に輝く傑作

ゴーチエの詩は、多くの一般読者ばかりでなく同じ詩人たちからも愛好された。シャルル・ボードレール（1821-1867）は『悪の華』（1857）で献辞を記し、ルコント・ド・リール（1818-1894）らの高踏派は創作の拠り所をゴーチエの芸術論に求めた。次に記載する一篇は今日でも非常に人気の高い詩である。

ばらの精

お前の閉じた臉をあけて、

処女（おとめ）の夢を追いついてしまいなさい！

私は、お前が昨日、舞踏会に行くとき

付けて行ったばらの精。
お前は今もまだ、如露の銀の涙に
露の玉を飾った私を、身につけたまま。
そして、星のきらめくお祭りの夜に
お前は私を、一晩中、連れて歩いたわね。

おお、私に死をもたらしたお前！
お前が追い出してしまわぬ限り、
私のばら色の精は、毎夜毎晩
お前の枕辺にやって来て踊るでしょうよ。
でも、こわがることはないよ、私は別に
ミサもお祈りも求めてるわけじゃないわ。
この軽やかな匂いこそ、私の魂、
そして私はやって来る、天国から。

欲望のままに振舞うのが私の運命、
そんなすてきな運命ならば、
もっと沢山の運命とでも交換したいとは思わないわ。
だって、私の墓はお前の胸の上にあるんだもの。
私が憩うその白い大理石のような胸に、
一人の詩人が、口づけで、こう書き残したわ：
「ここに、なべての王をして嫉妬せしめん
一輪のばら、横たわりぬ」——。²⁾

19世紀を代表する音楽家エクトール・ベルリオーズ（1803-69）は、「フランス歌曲において、従来の〈ロマンス〉に代わり、音楽と詩の結びつきが強い近代的なジャンルである〈メロディー〉を発展させた³⁾」一人である。その歌曲集《夏の夜》（1841）は、ゴーチエの詩集『死の喜劇』（1838）から6つの詩編を選んで作曲したものである。この中に含まれている〈薔薇の精〉は、オペラ歌手に好んで歌われるだけでなく、バレエの世界でも

大きな足跡を残した。

1911年4月19日、モンテ・カルロ歌劇場でパリを中心に活動するバレエ・リュス（ロシア・バレエ団）の創作《薔薇の精》が初演された。庭の薔薇を付けて舞踏会に行った少女が館に戻ってまどろむと、薔薇の精が現れて踊るというジャン＝ルイ・ヴォードワイエ（1883-1963）による台本で、ミハイル・フォーキン（1880-1942）が振付し、ヴァーツラフ・ニジンスキー（1888-1950）が薔薇の精を、タマラ・カルサヴィナ（1885-1978）が少女を演じた。抒情性と怪奇さの融合する詩的な空間の出現は大きな衝撃となったが、現在ではニジンスキーによる伝説の舞台に近づくことを夢見る世界中のバレエ団のレパートリーに入っている。



図2 《薔薇の精》のニジンスキーとカルサヴィナ

ゴーチエの詩ばかりでなく、小説もまたバレエのもとになっている。1862年1月30日、サンクトペテルブルク大劇場で初演された《ファラオの娘》は、ゴーチエの『ミイラ物語』（1858）からその友人でもあるジュール＝アンリ・ヴェルノワ・ド・サン＝ジョルジュ（1799-1875）が台本を作った。エジプトへ遺跡の発掘に來たイギリス人のウィルソン卿は嵐を避けて入ったピラミッドの中で阿片を吸うと、古代にタイムスリップしてエジプト人の若者タオールとなる。王女アスピシアと出会い、波瀾万丈の冒険の後、めでたく結婚するという展開である。マリウス・プティパ（1818-1910）が原振付をしたこのバレエはいったん上演が途絶えたが、ピエール・ラコット（1932-）が2000年モスクワ・ボリショイ劇場のために復元振付をしてレパートリーに復活した。ゴーチエの作品をバレエにする試みが成功したのは、その詩文がもつ絵画性は場面に仕立てやすく、幻想性は非現実的なバレエの世界に適合するものであったことが大きな要因である

う。

ゴーチエ自身バレエ批評あるいは台本作法という形でバレエの世界には早くから親しんだ作家であった。1837年6月『ラ・プレス』紙の社主エミール・ド・ジラルダン（1802-1881）は、空席となった演劇欄執筆者を、美術欄を担当して好評を得ているゴーチエに兼任させようとする。この新しい職務を親友のジェラルム・ド・ネルヴァル（1808-1855）と分担するという条件で引き受けたが、ゴーチエは演劇欄担当としての最初の記事をオペラ座で1837年7月5日に初演されたバレエ・パントマイム《モヒカン族》について書く。音楽は、バレエ《ドナウの娘》（1836）とオペラ・コミック《ロンジュモールの御者》（1836）で人気が高まった、アドルフ・アダマン（1803-1856）が作曲した。台本は前年にオペラ座と契約したナポリ出身のダンサーであるアントニオ・グエッラ（1810-1846）によるものだったが、これは酷評された。ゴーチエも記事の中で「口笛でやじられてこれほど当然の作品はかつてなかった⁴⁾」と述べる。《モヒカン族》はわずか2回の上演で打ち切りとなり、グエッラは1年だけの在籍で翌シーズンはロンドンに移ることになる。

ゴーチエは低俗かつ凡庸であることの多い通常の演劇の上演については辛口の批評が多かったが、バレエについては美点を見出そうとする好意的な態度を大体はとっていた。造形美に敏感なこの詩人は、詩が身体の表現によって実体化されて一瞬の美が生まれることを好み、特に女性ダンサーが具現する舞台芸術を高く評価した。1830年代半ばのオペラ座バレエ団の二大スターは、《ラ・シルフィード》（1832）でロマンティック・バレエの世界を確立したマリー・タリオーニ（1804-1884）と《びっこの悪魔》（1836）での官能的なスペインの踊りなどで人気を集めたファニー・エルスラー（1810-1884）である。1837年9月には、ゴーチエも個性の異なる二人のバレリーナについて後世にまで名高い評言を残した。

タリオーニ嬢はキリスト教の踊り手である […]。タリオーニは白モスリンを好んで身にまとい、その半透明の霏のなかで精霊のように飛翔する。ばら色の爪先で天上の花々の先端をほんのわずかにたわめる幸福な魂に似ている。ファニー・

エルスラーは完全に異教の踊り手である。彼女のタンバリンと、腿のところにスリットが入り、金色のホックで飾ったチュニクは、舞踊のミューズ、テルプシコラーを思い出させる。⁵⁾

この二人に並び立つことのできるバレリーナなど現れることはないと思われていた頃、オペラ座の元ダンサーとして国外で公演活動をしていたジュール・ペロー（1810-1892）がイタリアで見つけて弟子にしたカルロッタ・グリジを連れて1840年にパリに戻ってくる。オペラ座にデビューしたのは、ガエターノ・ドニゼッティ（1797-1848）作曲のフランス語オペラ《ファヴォリト》（1840）の中のパレエ・シーンを踊った1841年2月でのことである。

ゴーチエはその踊りを見て文字通り征服されてしまった。しかも賛美するだけでなく、彼女のために彼女にふさわしいバレエの作品を自ら書き上げようと思いつく。その素材として着目したのは、友人であるドイツからの亡命者ハインリッヒ・ハイネ（1797-1856）の『ドイツ論⁶⁾』（1835）の中の一節だった。

オーストリアの一部には、スラブ起源の伝承が残っている。それはウィリという名で知られる夜に踊る女たちの伝承である。ウィリは、婚約が整いながらも、婚礼の日の前に死んだ娘たちである。この哀れな若い娘たちは、墓の下で静かに眠り続けることができない。⁷⁾



図3 アルフレッド・エドワード・シャロン『三美神』（左から《シルフィード》のタリオーニ、《びっこの悪魔》のエルスレール、《ゼントの美しい娘》のグリジ）

これに靈感を得たゴーチエは、日常生活の中に非現実的な世界が侵入して

くる幻想文学の作者でもあり、不幸な巡り合わせのために結ばれることのない愛というテーマを組み入れて、2幕の筋書きを考案した。第1幕では、村娘ジゼルはよそもののアルブレヒトと恋仲である。その男は身分違いの人間だと言う村の青年ヒラリオンの言葉をジゼルは信じない。ところが狩りに来た領主一行の中にいる公爵令嬢がアルブレヒトの婚約者であるとわかり、ジゼルは狂乱の末に息絶える。第2幕での森の中の墓場は、結婚前に死んだ処女が精霊となったヴィリたちが集まり、その女王ミルタの指示で夜に通りにかかる男を死ぬまで踊らせる場所である。アルブレヒトはジゼルの墓前に花を捧げに来るが、ミルタに見つかってしまう。ジゼルはアルブレヒトをかばいながら踊り、精霊たちが消える朝日を待つ。

ゴーチエは自分の構想がバレエの展開に適切なものとなるように、ベテランの台本作家ヴェルノワ・ド・サン＝ジョルジュの手を借りて完成させた。初演は1841年6月28日で、カルロッタ・グリジのジゼルの相手となるアルブレヒト役は、バレエ団のスター・ダンサーであるリュシアン・ブティパ（1815-1898）が踊った。アドルフ・アダン作曲の音楽は秀逸で、振付はオペラ座バレエ・マスターであるジャン・コラーリ（1779-1854）と特にカルロッタ・グリジが登場する場面はジュール・ペローが受け持ったが、ヴィリたちの踊りが醸し出す神秘的な雰囲気は圧倒的なものだった。この公演は大成功をおさめ、その後《ジゼル》はオペラ座を代表するバレエ作品にも、3大バレエ・ブランの一つにもなる⁸⁾。

ゴーチエは舞台評を「コートレにあるハインリッヒ・ハイネに」という書き出しで、ピレネー地方の湯治場にいる友人宛の書簡という形式で発表している。あらずじや舞台作りの描写と解説が長く続いて、締めくくりの直前にヒロインへの言及を行う。

カルロッタの踊りは非の打ちどころなく、軽やかで大胆、その細やかで清純な官能の表現は、彼女をエルスレールとタリオーニのあいだの最上級のランクに位置づける。パントマイムに関しては彼女はあらゆる期待を凌駕した。型にはまった所作は全然見せず、わざとらしい動きもなかった。⁹⁾

新人バレリーナのファンになって、彼女が主役を踊るバレエ作品の台本を構想した者の評にしては、褒めるにしても言葉が少ないように思われる。

しかしゴーチエがカルロッタに夢中になっていたことは、《ジゼル》の初演を6月28日という彼女の誕生日にしたこと、この日に上演できるよう、台本を急いで書くだけではなく、他のすべての段取りに関わったこと、初演まで、毎日のようにオペラ座の稽古場に通い詰め、上演期間中は舞台袖で彼女を見守り、幕間に元気づけてあげていたことから明らかである¹⁰⁾。

カルロッタへの心酔は芸術の美を体現する姿を目の当たりにして深まるばかりであることは、舞台に立つスターたちの言葉による肖像画とも言うべき『劇場芸術家の画廊』（1841）でのカルロッタ賛辞からもうかがえる。



図4 《ジゼル》を踊るカルロッタ・グリジ

カルロッタは名前の示すようにイタリアの出ではあるが金髪、見ようによっては明るい栗色の髪をしている。目はとても澄んでいて柔らかい青。口は小さく上品であどけなく、ほとんどいつも瑞々しい微笑みを浮かべている。それは女優の唇によく浮かんでいるわざとらしい笑みとはまったく異なった自然な微笑みだ。顔色は類を見ないほど優美で生き生きとしていて、今にも花開かんとしているティー・ローズのようだ。ほっそりとして軽やかな体は、訓練中の競走馬のように骨と筋肉ばかりに見えるダンサーたちの体とは異なって、きりっと締まっている。グリジは疲れを知らず、辛いなどということとまるで無縁のように、本当に踊りが好きで楽しんでいる。あたかも初めての舞踏会に出る少女のようだ。やらなければならない課題がどれほど困難であっても、グリジはそれをいともたやすくやってのけるが、これはそうあるべき姿であって、芸術の世界ではいかにも

苦勞して克服しました、というのが観客の目に見えることほど見苦しいものもない。¹¹⁾

ゴーチエはこの理想的なバレリーナである魅力的な女性のために、次のバレエ台本の制作に取りかかり、カイロを舞台にしたアラビアのドン・ファンであるアクメと妖精ペリの恋物語を仕上げる。《ラ・ペリ》は、1843年7月17日、パリ・オペラ座で初演された。振付はジャン・コラーリで、音楽はフリードリヒ・ブルクミュラー（1806-1874）による。アクメはリュシアン・プティパが今回も踊り、カルロッタ・グリジは再び観客の絶賛を博した。



図5 《ラ・ペリ》を踊るカルロッタ・グリジ

ゴーチエはその舞台評を「カイロにあるわが友ジェラルール・ド・ネルヴァルに」という書き出しで、旅行中の友人宛の書簡という形式で発表している。

狂いのない、しかも大胆なカルロッタのダンスには独特の風格がある。彼女はタリオーニにもエルスレールにも似ていない。そのポーズのひとつひとつに、動きのそれぞれに個性の刻印が見てとれる。これほど偏狭な技芸において新境地を開くとは！ […] もしばくの名前が麗々しく載っていなければ、この魅力的なカルロッタのことをほくは君にどれほど褒めて書くことだろう！¹²⁾

カルロッタは最高のバレリーナであり、女性としての魅力も申し分ない。1842年3月にジュール・ペローとカルロッタ・グリジがロンドンで《ジゼル》の巡業をする際には、同行して彼女の世話をさまざまに見る。ゴーチエは、7月にカルロッタがパリ・オペラ座で《ゲントの美しい娘》を踊る頃には、同居している母マリエッタと姉のオペラ歌手エルネスタ・グリジ

（1816-1895）の家の常連客であり、オペラ座でその姿が見られない日はない。ゴシップ新聞でゴーチエとカルロッタの仲が揶揄の種になるほど、詩人の熱中ぶりは誰の目にも明らかなのである。31歳のゴーチエは23歳のカルロッタを征服して、夢見る幸福を手に入れるのだろうか。

1843年11月、パリでの初演で大好評だった《ラ・ペリ》は、すぐさまロンドンでも巡業を求められた。ゴーチエは今度も応援に駆けつけるが、途中でルーアンに寄り、当地の歌劇場に出演したエルネスタを連れてきた。イギリス入国のときにゴーチエは、最愛の女性の姉を自分の妻だと言明するのである。この若者は、晩年の傑作『スピリット』の中で遅すぎる警告を自らに放つことになるが、人生において取り返しのつかない間違った選択をしてしまう。

2 盛んな恋愛体験と矛盾する行動

プレイボーイとして青年時代を過ごし、艶福家として中年時代を送るゴーチエは、数え切れないほどの女性と愛を交わした。書簡集や伝記を読み進めると、情愛深い女性に恵まれることが多かったとわかるが、自分の意志で重大な決定を下すときには信じがたい愚行や頑迷な振る舞いを繰り返すという印象を受ける。数人だけに限って恋愛体験を追ってみよう。1829年、ゴーチエは18歳の時に初めての性体験をもつ。相手は現在のテュレンヌ通りというバステューユに近いところで貸本閲覧室を営む18歳年上の未亡人であるダマラン夫人だった。お金のない文学少年はこの貸本屋に通っていて目を付けられた。若い頃のゴーチエは、水泳、乗馬、ボクシング、武闘術などスポーツも万能な、すらりとした美男子だった。年上の女性に誘惑されて愛の歓びを知ることになるが、その愛人関係は1842年頃まで断続的に保たれる。



図6 ゴーチエ30歳前後の肖像画

1830年にゴーチエの両親はロワイヤル広場（今日のヴォージュ広場）に面する建物に引っ越す。この広場には、ロマン派の若き指導者である詩人ヴィクトル・ユゴー（1802-85）も家を構えており、ゴーチエはそのサロンの常連となる。この年の幸運はさらに続き、近所に住む美しい娘ウジェニー・フォール（1812-1881）と言葉を交わすようになる。19歳の青年と18歳の乙女は広場の木陰のベンチで語り合うようになるが、彼女は誰にも好感を与える愛らしい面立ちの品のある女性だった。ウジェニーの父親は元軍人のセールスマンで子供が8人いて、家は豊かではないが篤実な人たちに囲まれていた。ゴーチエは、弟妹たちの面倒見がよくて、才気煥発な彼女とお喋りするの楽しいし、その体にも惹かれる。しかし羞恥心と倫理観の強いウジェニーが許してくれるのは甘い言葉だけなので、セックスの喜びは他の女性たちと試すことを続ける。

転機は、1834年にゴーチエの父がパリ近郊の税関事務所に転勤となり、引っ越したことで訪れる。ゴーチエはパリの中心から離れたたくなく、高校以来の親友であるジェラルド・ド・ネルヴァルが住むルーヴル宮前のドワイエネ小路に隣接するドワイエネ街に住み始める。芸術と酒と恋愛のボヘミアン生活を始める。快樂を追い求めるあまり、制作が滞りがちだったこの時期に書き上げた傑作が、1835年11月刊行の『モーパン嬢』である。理想の美を夢見て目の前の恋人ロゼットを心底から愛せない青年ダルベールは、美を最高の価値基準とする作者の分身とも解釈される。そのダルベールを惹きつけるテオドールは、実は男装した麗人モーパン嬢であり、本当の愛に値する者を見つけるために諸国を遍歴している。愛する者の前から逃げ出すという点においては、モーパン嬢もまたゴーチエの人生を先取りしているかのような人物である。この小説は同性愛文学ととられ世間の輿論を買ったが、ユゴーや新しい時代の小説の大家となりつつあるオノレ・ド・バルザック（1799-1850）には高く評価された。

1836年2月17日、恋愛経験を積んだゴーチエは、忘れられないウジェニーに「僕の愛しい天使さん、君にたまらなく会いたい…君に何遍も言わなくてはいけない大切なことがあるし、君に何遍もしなくてはいけない大切なキスがある。僕のところに来ることができるなら、お願いだ」という手紙

を書く。ウジェニーは翌18日に「そうできるし、そうしたいわ。あなたの手紙が来るまで、勇気がなかったの。明日金曜日の夕方6時にあなたのお家に行くと約束する。でも一人でいてね、誰にも会うことがないようにして」という返事を送る。3月初めにゴーチエは年下の女性との恋の指南役をしてくれたアルジェリアにいる友人宛の手紙で「おまえの助言のおかげで、僕はようやく愛しいウジェニーから処女を奪うことができた。愉快だったよ」と報告する¹³⁾。

しかし愉快的青春の日々は、二人のどちらにも続かない事態となる。ウジェニーはすぐに子供を宿し、1836年11月29日に男の子を出産する。ウジェニーの実直な両親はゴーチエに娘と結婚することを求める。ところがこの青年はウジェニーと結婚することを拒否するだけでなく、子供の認知もしない。ウジェニーの兄は不誠実な態度しか見せないゴーチエに決闘を申し込む。ところがフェンシングの達人でもあるゴーチエは、剣ですぐにその兄の腕に血をにじませてしまう。そこで双方の証人4人とも決闘を中断させて、ゴーチエに正気に戻れと諭す。ためらいはしたが結局折れて、この若者は、1836年12月7日、第4区の区役所で出生証明書に自分が父親であると認める書類を作成させる。ちなみに父親と同じテオフィルと名付けられたこの私生児は、ゴーチエから定期的に養育費を受け取るウジェニーによって立派に育てられ、第2帝政下で官僚となり、父親のジャーナリズムの仕事も手伝うことができるようになる。その孫のテオフィルと定期的に出会うゴーチエの両親はウジェニーが大のお気に入りとなり、どうして息子がこんな気立ての良い娘と結婚しないのか一生疑問に思うことになる。またウジェニーは、その後ゴーチエが信頼する生涯の友人になる。彼女は、ゴーチエの病気やエルネスタとの家庭でのいさかい、革命や戦争という困難な時の相談相手であったことが残された書簡からわかる。

ドワイエネ街のボヘミアン仲間で、決闘の証人の一人であったアルセウス・ウーセイ（1814-1896）は、自伝の中でウジェニーのことを次のように回想している。

私は若い母親にとっても好感を抱いていた。彼女は生まれも良く、美しく、きちん

と考える、優しい子で、詩人にとって本物のミューズだった。彼女が間違いをしたのは一度だけで、それがテオ [= ゴーチエ] への愛だった。彼女と結婚していれば彼にとって人生の救いとなっただろうに。¹⁴⁾

その行動は友人にも理解しがたいものだったのだが、25歳のゴーチエは子供ができてパニックにおちいったのだろうか。もっと美しい理想の女性との愛の人生を夢見ていたのだろうか。だがゴーチエが人生の伴侶に選んだのは、特段の美人でも才媛でもなかった。

1843年の末に32歳のゴーチエは、5歳年下のエルネスタ・グリジと急速に親しくなり、翌年には多くの友人や知人がその妻として付き合い始める。エルネスタは、1838年にオペラ座と並びパリの二大歌劇場の一つであるイタリア座と契約し、ヴィンチェンツォ・ベッリーニ（1801-1835）作曲の《ノルマ》公演で、若き巫女アダルジーザを歌ってパリの舞台にデビューした。主役である巫女の長ノルマは、この作品が1831年にミラノで初演されたときにアダルジーザ役だったジュリア・グリジ（1811-1869）だった。史上初めてのディーヴァと言えるマリア・マリブラン（1808-1836）亡き後、最も輝かしいオペラ歌手としてイタリア座に君臨していたジュリアは、エルネスタとカルロッタの従姉である¹⁵⁾。ゴーチエがエルネスタを初めて目にするのはこの《ノルマ》公演のときだったが、演劇欄で次のように評している。



図7 ゴーチエによるエルネスタの肖像画

彼女は小柄で、かなりぽっちゃりとしている。短めの丸顔はふっくらとしていて、とてもきれいな眼の瞳は海の青の色で、黒い眉は筆でさっと刷いたようだ。[…] 結局のところ、かたわらにあの神々しい生ける大理石とも言うべき者がいなければ、エルネスタ・グリジ嬢はずいぶんと美しく見えることだろう。¹⁶⁾

正式な結婚はしなくてもゴーチエ夫人として

生活をともにすることになる5年前に初めてこのオペラ歌手を目にしたときは、大理石の彫像のような美しさを持つ従姉のジュリアと比べると彼女は色褪せた存在でしかないと評しているのだ。

エルネスタは、ジュリアやカルロッタに何度もチャンスを作ってもらいが、主役になれる歌手だと認められることはない。従姉がオペラの世界で、妹がバレエの世界で頂点に立ったのとは異なり、生涯脇役に甘んじることになる。ゴーチエは自分の才能に自信が持てないこのオペラ歌手に同情して付き合い始めたのだろうか。自分自身は、『ラ・プレス』紙文芸欄の編集長として影響力をふるうが、詩のユゴーでもなければ、小説のバルザックでもない。ゴーチエは自分に見合った者としてエルネスタを抱き寄せたのだろうか。それともリゾットとマカロニ料理が得意で、1844年に若いカップルがナヴァラン街の新居に移ってから、1857年に中年夫婦がパリ西隣のヌイイに一軒家を構えてからも、大勢の招待客を満足させる役は果たせる連れ合いを持つことに満足したのだろうか。ともあれ浮気相手に不足しないゴーチエは、1845年にジュディットそして1847年にエステルという二人の娘を授けてくれるエルネスタとの家庭生活を安穩に暮らしていく。



図8 ヌイイ市ゴーチエ邸の庭での
1857年撮影の家族写真

1861年8月3日、ゴーチエはサンクトペテルブルクへと旅立つ。9月28日、ロシア旅行記の材料を仕入れ帰国の途につくが、ゴーチエはパリに直行せず、ジュネーヴに立ち寄る。このスイスの町の当時は郊外であったサン＝ジャン地区にある館にはカルロッタ・グリジが住んでいた。ゴーチエの旅行中、エルネスタは二人の娘を連れて、母と妹に会いに来ていたのである。かつて崇拜的であった女性との再会は、ゴーチエ晩年の人生に大きな渴望を生じさせることになる。

カルロッタは、《ラ・ペリ》の後も、《パキータ》(1846)のパキータや《妖精の名付け子》(1849)のイゾールなどの主役を踊った。パリ・オペラ座との契約終了後、活動の中心を国外に移し、1850年からの3シーズンはサンクトペテルブルグで人気を集め、1854年にはポーランドのワルシャワで成功を収める。しかし当地の貴族であるレオン・ラジウィルの子を妊娠したため引退を決意し、1855年からラジウィル公爵から贈られたサン＝ジャンの小さな城に生まれたばかりの子供レオンティースと母親マリエッタとともに暮らしていた。1861年に50歳になったゴーチエは、サン＝ジャンに到着後すぐにリュウマチの症状が悪化してしばらく起き上がれない状態になった。10月23日に家族を連れてヌイイに戻ることができたが、予定を超過した滞在のおかげでカルロッタの優しさ、愛らしさに触れる強い喜びを再び味わったのである。それ以後ゴーチエは一人で、あるいは家族か次女のエステルとともにサン＝ジャンを頻繁に来訪するようになる。恋心のある友情関係が復活したのは、1864年9月の初めから1ヶ月あまり一人で滞在中のことだった。ゴーチエは見られてもかまわない手紙のやりとりは今までどおりヌイイの自宅宛で、二人だけの秘密の文通は新聞社近くの局留めにするのをカルロッタに承諾させた。パリに戻るとゴーチエは10月19日付けの手紙で思いを綴る。



図9 46歳のゴーチエ

僕は幸せな旅を経てパリに着きました。もしあなたから僕を離れさせてしまうことを幸せと呼ぶことができるのならですが。[...]あの5週間は夢のように過ぎました。僕のうんざりするような灰色の生活の一角に広がる青空のような思い出です。¹⁷⁾

多忙と飽食のためにかつてのスマートな体格は見ると影もない姿になっていたが、ゴーチエは揺れ動く青春の心を取り戻したのかもしれない。

1865年はゴーチエの精神世界を揺れ動かす出来事が次々と起こる。1863年、18歳になった長女のジュディット・ゴーチエ(1845-1917)は、パド

ルーのコンサート会場で出会った若者に恋をする。それはカチュル・マンデス（1841-1909）だったが、ゴーチエはこの高等派の詩人を評価せず、娘に交際を禁止する。ところがジュディットはマンデスと連絡を取り合い、65年には翌年成人になったら父の同意がなくても結婚すると言い出す。人一倍愛情と教育を注ぎ込み、少女の時から父の仕事を手伝うことができるほどの才媛であり美少女であった娘に裏切られたという思いは深い。さらに妻は娘の行動を陰で応援していたと見るゴーチエとエルネスタの夫婦仲は最悪の状態に陥る。その間にサン＝ジャンでも一大事件が起きていた。愛人であり庇護者であったラジウィル公爵がカルロッタに別離を告げたのだ。愛とはなんなのか、ゴーチエがはっきりとわかるのは一番大きな愛の対象はカルロッタであったと日々思い出す自分がいることだ。1865年3月初めの手紙で、ゴーチエはカルロッタに「あの頃僕は臆病で口に出すことはできなかったけれど、どれほど僕はあなたのことを愛していたか！¹⁸⁾」と《ジゼル》初演の頃を振り返るのである。



図10 《ジゼル》公演中のパリ・オペラ座（1864）

1865年7月26日、ゴーチエはカルロッタにジュネーヴで再会する。それから11月初頭までサン＝ジャンに滞在するが、カルロッタの存在とその館の周りに広がる庭園はゴーチエの心に平安をもたらす。たとえ姉思いのカルロッタが不倫を許してくれなくても、彼女のかたわらにすることが至福

をもたらす。その状態で執筆されたのが、ゴーチエにとっては最高の傑作である『スピリット』である。

3 『スピリット』の世界とカルロット

1865年11月17日に『ル・モニトゥール・ユニヴェルセル』紙で『スピリット』連載が開始された。その主人公は文芸の教養が高い、遠方への旅行を趣味とする独身の貴族ギー・ド・マリヴェールで、彼には社交界で人気の若き未亡人ダンベルクール夫人と結婚するという噂が立てられている。ギーは他に格段気を引く女性がいないので結婚してもよいかと思い始めた頃、ダンベルクール夫人に会う気がなくなる不思議な出来事が頻出するようになる。それはギーを一目見た瞬間運命の人だと悟ったが、言葉を交わす前に病死した美しいラヴィニアの仕業だ。この少女は精霊となってスピリットという名前を持ち、もともと結ばれる運命にあったギーに音楽や自動記述によって、本当の愛の相手は自分であることを知らせようとする。神秘主義思想家エマヌエル・スウェーデンボルグ（1688-1772）の弟子であるフェロエ男爵の助けを借りて、ギーも天上の領域にある精霊たちの世界を見、約束された幸福への道を恋人とともに歩むことになる。以上があらすじであるが、この幻想小説はゴーチエの人生と創作の総決算であるような趣を呈する。

ゴーチエの最初期の幻想物語『コーヒー沸かし』（1831）では、ノルマンディーの屋敷に招かれた主人公の画学生は、夜中自分の寝室にかかっている肖像画の人物たちが床に降りて舞踏会を始め、コーヒー沸かしが美しい娘となって自分と踊り始めるという夢を見たと思う。ところが翌朝意外な顛末を迎える。

やがて邸の主人が勝負を終わって、ぼくの肩越しに仕事ぶりを見に来て「この顔は妹のアンジェラにおどろくほど似ているよ」と言った。

実際、今までコーヒー沸かしを描いたつもりでいたのに、それがアンジェラのやさしい、少し愁いを含んだ横顔と瓜二つになっていたのだ。

「天国のすべての聖者にかけて、妹さんは死んだのか生きているのか」とぼくは自分の命が相手の返事にかかっているかのように、震え声で訊いた。

「死んだんだ、二年前に、ダンスのあとで肺炎にかかってね」

「そりゃ！」とぼくは痛ましい思いで答えた。

そして、落ちようとする涙をおさえながら、画帳のなかへデッサン用紙をしまった。

その刹那、ぼくはもはや地上には幸福がないと悟った。¹⁹⁾

この短編小説にはすれ違いのために現世では愛する人と結ばれないというテーマがある。『コーヒー沸かし』の主人公はアンジェラの瞳の向こうに彼女の魂のすべてを見るが、すべてを理解し合える美しい女性との出会いはゴーチエの夢だった。フランスにおける幻想小説の普及に貢献したゴーチエは、『恋する死女』（1836）で、現世と来世を行き来し、死よりも強い愛を一時身に受ける若者を語った。

来世への妄想に引きずられる危険を予防するためか、ゴーチエは現世における美の化身と幸福をつかむ小説も書く。『金羊毛』（1839）の主人公ティビュルスは、美の愛好者で絵筆も達者な青年だが、パリでは満足できる美しいものに出会えない人生に倦怠を覚えている。金髪の美女を探してアントワープまでやって来て、大聖堂で普段は展示されないルーベンスの傑作『キリスト降架』を目にする。そこに描かれている美しい金髪のマグダラのマリアに心を奪われ、その芸術作品に似ている町の娘グレートヒエンと親しくなる。ティビュルスがグレートヒエンを美しいと思うのは絵画のマリアを思い起こさせるからであり、そのマリアの衣装と姿勢を恋人に取らせて大喜びする。グレートヒエンは若者が自分を絵の代替物としてしか愛していないことに気づき、ある日道具を用意した上で、自分を絵に描くようティビュルスに言って、海に浮かぶアフロディーテのような全裸となる。その生きた美しい裸身を描く日が続くうちにティビュルスはマグダラのマリアを忘れ去り、グレートヒエンに結婚を申し込む。ここでは女性が理想の迷宮に陥った主人公を立ち直らせ、現実世界での幸福をとともに得ることができるという展望を開いている。

ゴーチエの小説における主人公は教養が高く美的趣味もある文学青年あるいは画家であることが多く、その点でゴーチエの分身と見なすことができる。しかし1865年における作者の代弁者であるギー・ド・マリヴェールは、いかにして真実の愛にたどり着くのか。ゴーチエにとっての真実の愛はカルロッタであることが、月日が経つほどに明らかとなる。パリに戻ったゴーチエは、11月17日の手紙で告白する。

どれほど努力をしようと、抗しがたいメランコリーにおそわれるのを感じてしまう。街と同じように僕の心にも雨が降っています。[…]僕の心はあなたのおそばサン＝ジャンにとどまっていて、それで僕は自分の身体をどうしてよいのやらわからないのです。僕の身体は毎日『ル・モニトゥール』紙に出かけ、『スピリット』の校正刷りを手直しています。これの刊行が今朝から始まったのです。お読みください、というよりは再読をしてください。というのも、あなたはもうご存知なのですから。この哀れな小説の取り柄はといえば、あなたの優美な面影を映し出していて、あなたの家の大きなマロニエの木の下で夢見られたもので、おそらくあなたの愛しい手がかつて触れたペンによって書かれたということしかありません。フィクションというベールの裏で僕の心のうちにあるただ一つの、真実の愛が息づいているその文章の上に、大好きなあなたの目が幾ばくかのとき注がれるという思いは、僕の費やした労力にたいするこの上もなく優しい報酬となるでしょう。²⁰⁾

小説のヒロインであるスピリットは、カルロッタの写し絵であり、カルロッタへのただ一つの愛がもたらす未来を示してくれる精霊なのだ。

スピリットはギーに「理想へのノスタルジーを創り出したり、むなしい恋愛を思いとどめさせたり、さらには現世が彼にもたらすことのできない幸福を予感させたりして²¹⁾」、死後の世界での幸福を夢見るように導く。愛する者のもとに早く行こうと自殺を企てる青年の前にスピリットが現れて、「人生を耐えて、それはどれほど長くても一粒の砂が落ちるほどでも続くものではないの。時間を耐えるために、わたしたちがずっと愛し合うことのできる永遠のことを考えて²²⁾」と説き伏せる。永遠の愛を得るため



図11 ギュスターヴ・ドレ「天国のダ
ンテとベアトリクス」(1861)

には、純潔な状態で現世の命を全うしなければならないからだ。小説の中の主人公は、ギリシアの山中で盗賊に襲われて死ぬ。非業の死ではあっても、自ら命を絶ったのではないから、愛する者とともに幸福の世界へと旅立つことができることになる。その時、パリでは友人のフェロエ男爵が部屋でスウェーデンボルグの『来世の結婚』を読んでいたが、突然満ちあふれた光の先に無限の天空が広がる。そこには翼が触れあうように戯れながら飛んでいるギーとスピリット

の姿が見える。それは天使たちの世界である。

互いに理想の男女は幸福のうちに一体となって天使に生まれ変わるのを目撃するフェロエ男爵の言葉で、この小説は終わる。

やがて、二人はますます近づき、それから百合の同じ葉の上を転がる二つのしずくのように、ついには混じり合いただ一つの露の玉となった。

「これである二人は永遠に幸せだ。彼らの魂は結びついて一人の愛の天使となる」と、フェロエ男爵は物憂げなため息をつきながら言った。「で私は、まだどれほど待たなくてはならないのだろうか？」²³⁾

永遠の幸福を得たギーはゴーチエの来世の姿であり、それをまだ待たなくてはならないフェロエ男爵は作者の現世の姿と見ることができる。過去の過ちを修正して、後は自然に命が終わるのを待つという晩年の選択は、『スピリット』の創作に後押しされたものであろう。

1866年には人生の整理にも取りかかる。ジュディットはマンデスとの結婚に執着しているのだから、成人前に式を挙げることを許す。4月17日の

結婚式には出席しないが、新婚夫婦には資金援助をする。エルネスタとは離縁するが、パリ近郊のヴィリエに新築中だった豪邸を彼女に譲り、年金も保証する。ゴーチエはヌイイの家に次女のエステルと残り、パリ南端に接するモンルージュに住む二人の妹リリーとゾエを呼び寄せて住まわせる。前年はパリ万博での絵画部門での責任者として活躍し、相変わらず批評界の大立者として多忙を極めるが、健康の不安を感じさせる病気が以後はたびたび起こるようになる。それでも生き続ける希望はもちろんカルロッタにある。1866年3月末の手紙は率直である。

僕のサン＝ジャンへの最初の旅は、僕を救ってくれました。僕の人生でただ一つの愛、ただ一つの望み、本当の憧れであった人に再会したからです。そうして、僕をその人から遠ざけることになってしまった過ち、そのために長く辛いあがないを課せられることになりましたが、その過ちをした僕をその人がもしかして許してくれるのではないかという希望を抱いたのです。この希望は、ご存知でしょう、愛しい天使よ、僕が生きるために与えている理由なのです。それは、僕の光であり、力であり、支えです。²⁴⁾

過ちとは、もちろん23年前にエルネスタを伴侶としたことである。1866年12月20日から1867年1月1日まで、ゴーチエはサン＝ジャンに滞在する。

天使のようなカルロッタは、姉にとっても庇護者となり、1867年2月にサン＝ジャンにエルネスタを迎え入れ、さまざまな相談にのってやる。レオンティーヌの洗礼では、エルネスタを代母にし、娘の名前もエルネスティヌと変える。姉とともにパリに戻ったカルロッタはヴィリエに泊まるが、ゴーチエは毎日のように彼女に会い、青年の頃のようにオペラ座などへエスコートをする騎士役を務める。1868年から1869年の2年間は、愛する人と一緒にいることが多くゴーチエにとって最も幸せな時だったかもしれない。1868年の5月から6月にかけて一ヶ月ほどのサン＝ジャン滞在の間に、カルロッタ、エルネスティヌ、エステルらとともにモンブランへと遠足に出かける。7月末に再びスイスに戻り、同じ仲間では今度はスイス南西部にあるマッターホルンから中央部のルツェルン湖へと遠征する。

幸福な画家の目で見えた自然は、『月曜日のヴァカンス 山岳風景』として、8月末から新聞に連載される。1869年の1月12日にはカルロッタがスイイにやってきて、4月2日まで滞在する。帝室に厚遇される文化人としてさまざまな公式行事をこなし、新しい新聞『ジュールナル・オフィシエル』紙の立ち上げに協力しながらも、9月の一月はカルロッタとヴァカンスをイタリアで過ごす。皇后ウジェニーは、フランス人実業家フェルディナンド・レセップス（1805-1894）が推進したスエズ運河の11月17日の開通式に、ゴーチエを招待する。エジプト旅行を楽しみ、カイロの歌劇場で《ジゼル》が上演された際には作者として万雷の拍手を受ける。12月に帰国するときには、ジュネーヴを経由してカルロッタに会ってから、パリに戻る。

1870年も滑り出しは申し分ない。ウジェニー・フォールとの間のトトという愛称で呼ぶ息子は、ポントワーズの副知事に任命され、直後の2月26日に富裕な遺産相続人であり容姿も端麗なエリーズ・ポルタルと結婚式を挙げる。あとは23歳になる次女エステルを結婚させれば、父親としての義務の遂行は完了になる。心穏やかにカルロッタと時を過ごす日は間近いと思われる。しかしリューマチや不整脈など身体の不調は、より頻繁に起きようになってきた。ようやく6月になってゴーチエは、2週間をサン＝ジャンで過ごすことができた。この頃からフランスとプロイセンの間の外交紛争が重大な局面を迎えつつあったが、ついに7月19日に普仏戦争が始まった。戦況が悪化する中の8月31日、ゴーチエはエステルをカルロッタに預けるためにスイスに到着する。9月2日ナポレオン3世（1808-1873）はスタンでプロイセン軍に降伏し、4日にはパリで民衆が第2帝政の廃止と国防政府の樹立を宣言する。帝政に深く関わった者たちが国外に逃れようとしているのに、ゴーチエは8日一人でパリに戻る。スイイの家は爆撃のおそれがあるため、家を預かる二人の妹を連れて、パリ市内の小さなアパルトマンを住まいとする。17日から「パリ旅行記」という連載記事を書き始めるが、これは後に本としてまとめられ『パリ攻囲情景』（1871）となる。このまさしく17日からパリはプロイセン軍に包囲され、外部との接触を遮断されてしまう。ゴーチエは気球を使って手紙をカルロッタやエステルに送るが、誰からも返事をもらう手段はない。苦しみは

飢餓が広まるにつれ大きくなる。サスペンダーなしではズボンが落ちてしまうほど痩せたゴーチエの体に、暖房のない冬は厳しい。1871年1月28日、ようやく休戦の合意が成立し、2月にはアドルフ・ティエール（1797-1877）が第3共和制の初代大統領に選出される。

ゴーチエは再びカルロッタのもとに行く準備を始めるが、出発を妨げる新たな事態が出現した。1871年3月18日、プロイセンとの屈辱的な休戦条件に不満を持つパリ駐屯の一部の軍人と市民が反乱を起こす。ティエールの政府がヴェルサイユに避難した後、28日には市役所前で史上初の社会主義的な自治政府であるパリ・コミューンの設立が宣言される。内戦は、5月21日から28日の「血の週間」によってコミューン兵士が一掃されるまで続く。鉄道の運行が正常化した6月半ば、ゴーチエはブリュッセルに行き、ベルギーに避難していたウジェニーと息子のトト夫妻、それに戦時中に生まれた孫息子に会う。その後すぐにもう11ヶ月も見ていないカルロッタのもとへ向かう。普仏戦争のためにパリでの不動産収入が途絶えたので、彼女はサン＝ジャンの館を貸し出し、自分はジュネーヴ市内のアパルトマンに引っ越していた。新居のすぐ近くに部屋を借りて年来の友に提供したが、ゴーチエの方はマロニエの木が並ぶ屋敷にいないカルロッタを見るのは不思議な感じであったようだ。久しぶりの幸福を1ヶ月味わった後、ゴーチエはエステルとともにパリに戻る。旧友のアルセヌ・ウーセイが新しい新聞『ガゼット・ド・パリ』紙を立ち上げるのに協力し、それにはエドモン・ド・ゴンクール（1822-1896）やテオドール・ド・バンヴィル（1823-1891）などの仲間たちも加わる。10月5日の第2号の一面に、政府がヴェルサイユを離れてパリに戻るよう訴えるパリ賛歌の記事を載せる。その後は毎週演劇欄に寄稿するという習慣を取り戻す。だが健康状態は徐々に悪化していく。再びジュネーヴに行く計画は、カルロッタが娘の療養のためにスペインに滞在することになったため中止となる。

1872年は年の初めにゴーチエとカルロッタが、それぞれクリスマスに書いた年賀をスイイとスペインで受け取ることから始まった。ティエール派が創刊した新聞『ビアン・ピュブリック』紙の3月3日号から毎週日曜日に回想記『ロマンチズムの歴史』の掲載を始めるが、5月12日号で中断し

てしまう。もはや健康状態が執筆活動を許さなくなっていたのだ。それでも一つの喜ぶべきことはまだ間に合う。次女のエステルが、有望な詩人で劇作家のエミール・ベルジュラ（1845-1923）と5月15日にヌイイの教会で結婚式を挙げる。この場には、エルネスタとウジェニー、トトとエリーズ、マンデスとジュディットも列席して、一族が再会した。新婚夫婦はすぐ隣に住み始め、ベルジュラはゴーチエの秘書役として日参する。ゴーチエは何度かカルロッタに自分の深刻な病状を記すが、再会する希望は捨てていない。5月末の手紙では、『七宝とカメオ』の第6版に際して特別な装丁の本を作らせたので、それを彼女に献呈するためスペインにまで行きたいと言う。しかし1872年6月19日の日記で、ウジェニー・フォールは「命が消えて行く²⁵⁾」ようだと見舞い後の印象を残す。8月には病状が安定し付き添い同伴で、スイスに戻ったカルロッタに会いに行く許可が医師から出る。月末の列車の予約もされたが、出発直前に病状が悪化し、旅行は中止される。義父の失意の様子をベルジュラはカルロッタに知らせ、サン＝ジャンの館に再び入居できる見込みとなるので、段取りが着き次第、彼女がヌイイにやって来ることとなる。もはや自宅の二階から下には滅多に降りられなくなったゴーチエの心に浮かぶのは、カルロッタの姿ばかりだ。1872年10月23日の朝、彼女はヌイイの家に着する。しかしその数分前にゴーチエは苦しむことなく永眠していた。

結び

死去の時点で、ゴーチエは61歳になっていた。カルロッタは53歳である。しかし愛する者とともにある幸福の世界を夢見るゴーチエにとって、天国は限りなくサン＝ジャンの庭園のようであり、そこにいる自分は若く、カルロッタは《ジゼル》公演時の姿のままであったであろう。楽園に住まう永遠の恋人はいつまでも若いままであるのだから。来世での愛が可能であると信じているところが驚くべきことかもしれない。これは狂気の愛であろうか。

ゴーチエは19世紀のフランスという資本主義が躍動し、産業革命が浸透



図12 ゴーチエの描いたサン＝ジャンの庭園



図13 1840年頃のカルロッタ・グリジ

し、科学と医学の進歩による社会の発展が自明のことと思われる時代に生きた。それはまた革命と戦争による体制の変革が頻繁に起きた時代でもあった。だがどれほど合理主義が強くなろうと、ゴーチエの心中には絶対の愛、理想の恋人が存在するというロマンティックな信念が青春の時から変わらずある。その思いが非常に強いだけに、そのことが人生にも創造にも決定的な刻印を残したのではないだろうか。言い換えると、今日に通底する近代社会の枠組みはいちはやくゴーチエの生きた19世紀のフランスで成立した。しかしその動きを推し進める合理主義は、多くの人々の心を豊かにする神秘主義を抹殺するには至らなかった²⁶⁾。理想の愛の存在を確信するゴーチエであるからこそ、しかるべき時に理想の相手に出会えなかった『コーヒー沸かし』を、本当の愛の相手は誰かと迷う『モーパン嬢』を、不幸な巡り合わせのために結ばれることのない恋人たちの《ジゼル》を創造することができたのだとわれわれは考える。もちろんあるべき人生について思い迷うこともあるゆえに、現世での最良の選択をする『金羊毛』の主人公を思い描くこともある。しかし心の奥底からわき出る声は真の愛へと導いてくれるゆえに、『スピリット』によって来世の幸福があることをペンにより定着させる。

恋の犠牲者であるジゼルはアルブレヒトを救ったが、ラヴィニアが新たなジゼルとなるのがスピリットという物語である。《ジゼル》も『スピリット』もヒロインは、悩める頼りない男性を導き、救う精霊となるからであ

る。それはゴーチエの願望の反映であるが、見方を変えると、その主人公は作者同様に女性たちの人生をかき回す身勝手な人間でしかない。だが、ウジェニー・フォール、エルネスタ・グリジ、あるいはカルロッタ・グリジ、誰もゴーチエを恨むどころか、深い愛着を持って彼の晩年を見守る。それは彼女たちも自分の人生が、思考も行動も矛盾するがゆえに魅力的であり、かつ誰にも善人であったゴーチエの存在によって豊かになった、面白いものになったと心の底から思うからではないだろうか。これについては証拠がなく、推察するよりしようがない。というのも19世紀の女性は自分の本心を明かす証拠は残さないからであり、女性の書簡集が後世に伝わるのは例外的である²⁷⁾。

女性たちの心情は永遠に謎であるにしても、ゴーチエの幸福の夢、真の愛の望みのおかげで、われわれは《ジゼル》と『スピリット』という傑作を舞台で、あるいは書物の中に堪能できる。それはわれわれもまた、19世紀の人間と変わらず、愛についての理想と希望を分かち抱いているからではないだろうか。

【注】

- 1) ゴーチエの全体像を把握するには、次の図書を参照すること：澤田肇、吉村和明、ミカエル・デプレ編『ゴーチエと19世紀芸術』、上智大学出版、2014年。
- 2) ジェシー・ノーマン《ベルリオーズ、夏の夜 作品7、ラヴェル、シェエラザード》フィリップス UCCP-3221、1980年より。CDパンフレットの詩は高崎保男訳。
- 3) 澤田肇『フランス・オペラの魅惑 舞台芸術論のための覚え書き』、上智大学出版、2013年、126頁。
- 4) Théophile Gautier, *Écrits sur la danse. Chroniques choisies, présentées et annotées par Ivor Guest*, Actes Sud (L'Art de la danse), 1995, p.35.
- 5) 「ラ・タンペート、あるいは妖精の島」(1837年9月1日『ラ・プレス』紙) 井村実名子訳、渡辺守章編『舞踊評論 ゴーチエ/マラルメ/ヴァレリー』新書館、1994年、11-12頁。
- 6) 1833年雑誌『ヨーロッパ文学』にフランス語で発表され、2年後に『ドイツ論』として刊行された。シリル・ボーモント『ジゼルという名のバレ

- エ』佐藤和哉訳、新書館、1992年、206頁注(1)参照。
- 7) ハインリッヒ・ハイネ「民間伝承」岡見さえ訳、『パリ・オペラ座バレエ団2010年日本公演プログラム』日本芸術振興会、2010年、38頁。
 - 8) 《ジゼル》以後のパリ・オペラ座の大人気作は《コッペリア》である。白い衣装チュチュとポワントによる踊りが特徴的なバレエ・ブランのもう二つの傑作とは、《ラ・シルフィード》(1832年オペラ座初演)と《白鳥の湖》(1877年モスクワ・ボリショイ劇場初演)である。
 - 9) 「ジゼル、あるいはヴィリたち」(『ラ・プレス』紙演劇欄、1841年7月5日)、渡辺守章編、前掲書、52頁。
 - 10) 伝記的なことについては次の図書およびテオフィル・ゴーチエ研究会のサイトを参照：Gérard de Senneville, *Théophile Gautier*, Fayard, 2004 : *Biographie de Gautier* (<http://www.theophilegautier.fr>)
 - 11) シリル・ボーモント、前掲書、116-117頁。
 - 12) 「ラ・ペリ」(『ラ・プレス』紙演劇欄、1843年7月25日)、渡辺守章編、前掲書、66-68頁。
 - 13) Gérard de Senneville, *op.cit.*, p.63. 手紙3通の抜粋の訳は、いずれも本論執筆者の手になる。以後の同書からの訳文も同様である。
 - 14) Gérard de Senneville, *op.cit.*, p.68.
 - 15) パリの歌劇場と女性歌手については、澤田肇『フランス・オペラの魅惑』中の「ディーヴェはフランスで誕生」と「パリのオペラ座とイタリア座」の各章を参照のこと。
 - 16) Gérard de Senneville, *op.cit.*, pp.157-158.
 - 17) *Ibid.*, p.353.
 - 18) *Ibid.*, p.359.
 - 19) ゴーチエ『死霊の恋・ボンベイ夜話 他三篇』田辺貞之助訳、岩波書店(岩波文庫)、1982年、145頁。訳文はわれわれの手により一部改変されている。
 - 20) この手紙は、カナダのゴーチエ研究サイトの書簡集にあるものを参照し、本論執筆者が訳出し、下線を引いた。
Cf. http://www.mta.ca/faculty/arts-letters/mlf/french/gautier/letters/files/no_23.htm
 - 21) Théophile Gautier, *Spirite*, in *Œuvres*, Robert Laffont (Bouquins), 1995, p.1460. 『スピリット』の日本語訳は本論執筆者の手になる。以後も同様である。
 - 22) *Ibid.*, p. 1512.
 - 23) *Ibid.*, p. 1530.

- 24) Gérard de Senneville, *op.cit.*, pp. 371-372.
- 25) *Ibid.*, p. 431.
- 26) 死後の世界の存在が多くの人々にとって当然であることに関連して思い起こすべきなのは、19世紀後半においても交霊術によって死者と交信することが頻繁に行われていた事実である。近代化とは死者との交流を断ちきる、死者の二重の抹殺の過程であるとも言える。そもそも〈Spirite〉という小説のタイトルは〈spiritisme（降霊術）〉を連想させるからやめろと、ゴーチエは息子には言われていた。交霊術の有名な例としては、次の図書を参照：稲垣直樹『ヴィクトル・ユゴーと交霊術』水声社、1993年。
- 27) たとえばバルザックについては膨大な書簡集が刊行されているが、その一部は恋人の『ハンスカ夫人への手紙』であって、夫人から受け取った手紙はない。それは夫人からの命令によって、バルザックがその手紙を焼き捨てたからである。ちなみにバルザックは、19世紀における幻想小説の傑作と見なされている『セラフィータ』（1835）を著したが、これもスウェーデンボルグ主義の影響を受けた作品である。

【参考文献】

ゴーチエ『死霊の恋・ボンベイ夜話 他三篇』田辺貞之助訳、岩波書店（岩波文庫）、1982年。（「コーヒー沸かし」所収）

テオフィル・ゴーチエ『スピリット』田辺貞之助訳、沖積舎、1981年。

——『ミイラ物語』田辺貞之助訳、国書刊行会（世界幻想文学大系）、1975年。

『ゴーチエ 七宝とカメオ／ネルヴァール 小歌詞、抒情、幻想詩編』齋藤磯雄、中村真一郎訳、平凡社（世界名詩集 12）、1968。

ゴーチエ、マラルメ、ヴァレリー『舞踊評論』井村実名子ほか訳、新書館、1994年。

シリル・ボーモント『ジゼルという名のバレエ』佐藤和哉訳、新書館、1992年。